

入選

テーマ…誰かのために、わたしができること 「病氣と共に背負うもの」

東京都立立川ろう学校2年 大森翠葉

高校生になってから、私は「母とは何か」をずっと考えてきました。私の母は、小学二年生の時に頭を打ち、検査を受けたところ、「脳動静脈奇形」と診断されました。これは、脳の血管の生まれつきの病気で、脳内の動脈と静脈が異常な血管で直接つながっているために、動脈の強い血液の流れが静脈や毛細血管に流れ込むことがあり、その時には脳内出血を起こしてしまいます。そのため、母は中学一年生の時に手術を受けました。途中で何度も死にかけたのだそうです。結局、手術は成功しましたが、その後遺症として、視野が狭くなり、癲癇てんかんの発作も起きやすくなりました。そして、これらの後遺症は、今でも母の生活に支障をきたしています。その後、成人してからもいろいろな病氣と闘いながら、姉、そして私を産んでくれました。妊娠が分かった時、母は主治医にとっても怒られたのだそうです。母のからだで出産をすることは母の命にかかわる危険なことだったからです。それでも母が出産を諦めずに頑張ってくれたので、私たちがいるのです。毎日一緒にいるのが当たり前だと思っていました。昔の母の話を聞いて、親がいることのありがたみがわかりました。

日常生活では、母から耳にタコができるくらい「お風呂に入りなさい」「早くご飯を食いなさい」と言われ、うるさいなと思ってしまう私ですが、本当は母のことを「病氣なのに苦労したな」と思っています。入院生活が長かったために、ほとんど中学校に通えなかったのに、何とか高校に入って高卒の資格を取りました。そして、三十才の時に専門学校に入って歯科衛生士の資格を取り、働き始めました。その時にはもう私たちがいましたし、年離れた母親、経済的な援助が必要になった姉、一人身の弟など、母は次々にいろいろな人の世話をすることになりました。病氣なのに「背負いすぎている」と母を見ていて思います。

癲癇てんかんという病氣のために、母は精神障害者保健福祉手帳を持っていますが、それによって受けられる支援は身体障害者手帳を持っている人ほどではありません。今でも月に一回は持病の検査のために通院し、精神科にもかかってサポートを受けている状態です。これまで、母は私たちを育てるために、地域の母子生活支援施設を使って急場をしのいできました。母が学校へ通う時や仕事で忙しい時、病院に入院する時などは必ずこの施設のお世話になり、それは、私が中学三年の時まで続きました。

私は今、お母さんのような人を少しでも助けられるような看護師になろうと考えています。病氣には治らない病氣があります。治らなければ、その病氣と闘いながら生活し、生きていく中で遭遇するさまざまなものを背負って進んでいくのだと思います。病氣の人に対する時、その人の病氣だけを見るのではなく、その人が今、どのような生活をしている人なのかという背景にも思いを巡らしてサポートをしていける、そんな看護師になりたいと思うのです。それが、この母のもとに生まれてきた私が、誰かのためにできることなのだと思うからです。